大相撲とその力士の身体表象に関する研究：NHKテレビ番組で描かれる力士の身体性について

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2014-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川野, 佐江子, カワノ, サエコ, KAWANO, Saeko メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/3876

BY-NC-ND

大相撲とその力士の身体表象に関する研究
―NHK テレビ番組で描かれる力士の身体性について―

学芸学部　被服学科　川野佐江子

要旨：本論は、大相撲における力士たちがどのように現代社会において表象されているのか、について探るものである。力士に関する先行研究には、歴史学的領域、文化人類学的領域、伝統芸能としての調査、医療やスポーツ健康学的領域からの研究などがある。いずれも相撲や力士の総論についての研究であり、具体的な力士の身体性に着目した研究は見られない。そこで本論では、現象学的身体論を背景にして、力士の身体が人間と社会の間でどのように表象されているのかを、NHK アーカイブスに保存されているテレビ映像を資料として調査する。そしてその結果を踏まえ、相撲や力士がどのような期待のもとに私たちの前に表象されているのかを明らかにする。なお本論は、NHK アーカイブス学術利用関西トライアルⅡ第 1 期の成果の一部である。

キーワード：相撲、力士、身体表象、NHK アーカイブス

0. はじめに

本論の目的は、大相撲における力士たちがどのように現代社会において表象されているのか、について探るものである。とくにその身体性が特異な存在として強調される力士たちにおいて、私たちはどのように彼らの身体を受け止めているのかを、NHK アーカイブスが保存するテレビの番組映像から検討していく。NHK アーカイブスを利用した本研究については 1. で説明をする。

まず、本論は相撲や力士についての研究の一つであるが、これまでの相撲研究や力士研究とはどういったものであったのかについて述べておく。

これまでの相撲や力士に関する研究は、主に次のような分野で行われてきた。まずは歴史学からの研究が挙げられる。それらの多くは、相撲の発生から現代に至るまでの史実や伝承を時系列で追っていく作業である。相撲は古墳時代の埴輪や須恵器にその様子が描写されているが、『日本書紀』には人間同士が相撲をとった最古の記録として、野見宿禰（のみのすくね）と当麻蹴速（たいまのけはや）が垂仁天皇の前で組み合ったことが記されている。日本相撲協会が新弟子教育に使うテキストでも、相撲の発祥をこの闘いに置いている。以降、相撲の節会（すまいのせちえ）や江戸時代の勧進相撲、明治時代に「国技」となったこと、天覧相撲の開催から、現在の大相撲に到るまでが、史実・伝説を取りそろえながら述べられ、語られるのが相撲の歴史である。その中には、歴代の横綱について調査したものなども含まれる。

次に、文化人類学の領域からの相撲研究は、歴史学的視点と重なりながら、たとえば次のようなテーマで行われている。まず、ある意味で職業力士の始まりであると言える勧進相撲について、または興業相撲として女相撲について、他にも現代もなお残る隠岐の古典相撲、愛媛県大三島の大山祇神社の一人角力（ひとりずもう）など、各地に残る伝統芸能や神事としての相撲についての研究である。また、祭事の意味での格闘技として、日本だけでなく世界各地に伝わる相撲研究などが挙げられる。その中には、現在日本の相撲界で活躍する力士を多数輩出する土壌を作っているモンゴル相撲なども含まれる。ほかにもアフリカのセネガル相撲や、朝鮮半島のシルムなど世界各国には相撲と類型の、男性 2 人が肉体のみで格闘する競技が存在していることが、文化人類学的相撲研究では知られている。

また、相撲の伝統芸能という部分に着目した研究も見られる。ここでは日本文化に特徴的と言える「様式美」にこだわった立場での相撲研究が見られる。たとえば、相撲の所作である塵手水、四股、仕切りや、勝負が付いた後の手刀などの動作や、行司の装束や軍配、相撲を演出する太鼓や拍子木、「相撲字」と呼ばれる番付に記される独特の文字、あるいは力士の化粧まわし、着衣や髪型など、さまざまな相撲独特の様式に注目した研究である。こられの研究は、実際には、相撲

の様式の意味について羅列することに終始しており、好角家の間では多く共有されている知識であるとともに、好角家が好角家であることのアイデンティティの一つであるとも言える。これら“伝統的”に受け継がれてきた様式を美の基準として、相撲美の価値観は問われることになっている。

科学的な知見から相撲を研究するものもある。それは大きく二つに分けることができ、一つは医療目的の立場から、もう一つはスポーツ科学の立場からである。一つ目の医療目的の研究には、アスリートのケガに関わる諸問題（原因、治療方法、競技別外傷の傾向、など）と、力士だけに限らず一般成人の肥満体質に関わる諸問題（成人病、脂質代謝、糖質代謝、呼吸器系、循環器系などの）などの領域で力士研究が行われている。二つ目のスポーツ科学では、身体測定、運動能力測定、体脂肪率などの測定値から、力士の身体的特徴や筋繊維の量などを計測し、相撲競技者としていかに有利な身体を作り出すか、あるいは相撲競技者をどのように育成するかなどが論じられている。

以上のように、相撲や力士に関する先行研究は、歴史的側面、文化人類学的側面、伝統芸能という側面、そしてスポーツ医学やスポーツ教育などの側面からの研究が主な領域になっている。換言すれば、むしろ相撲はこれらの領域だけに限られた研究としてのみ行われてきた傾向にあることを表している。それはおそらく、そもそも相撲というテーマがこれまでの学問の俎上からは見落とされていることにあるからだろう。相撲は、古来続く日本の伝統的格闘技であるとされ、江戸時代に興行として大衆文化の一つとなり、戦後はマスメディアの発達とともに社会的認知の盛衰をたどっている。このような相撲と社会の関係は、常に祭・遊び・余暇といったものであり、近代社会や近代的制度とは相反すると位置づけられてきた。したがって、相撲は“正統”的アカデミアにおけるヒエラルキーでは、マイノリティな研究テーマでもあるのだ。つまり一般的に相撲は、ニッチな趣味人によってその同好会的世界において語られるもの、少年時代の思い出とともにノスタルジックに語られるもの、あるいは興行の世界で語られるもの、トリビアの一つとして語られるもの、という位置づけなのである。さらに言うならば、相撲研究は先行研究の状況をみてきたように、ある意味で閉塞的でもあり、その研究内容は飽和しているとも言える。つまり、「伝統」の名の下に「変わらない」ことを前提としているものが「相撲」であり、その結果、相撲に関する言説は、相撲史観を固定化させ、様式を美の基準とすることで、これまでの相撲観とは異なった視点での相撲研究を展開することを困難にさせているのだ。

しかし一方でたとえば近年の文化研究では、サブカルチャーが注目されるなど、アカデミア・ヒエラルキーにおいてマイノリティであった事象が、さまざまな視点から研究の俎上に上ってきている。その意味において相撲についても新たな視点からの主題をもった研究を行いたいというのが、著者の思惑でもある。相撲は相撲だけに閉じた事象ではなく、そこには生の人間としての力士が存在し、肉体同士をぶつけ合う格闘という事象が存在する。身体そのものが可視化されているという意味では、著者のもっとも関心を持っている、現象学から見た身体論のテーマとして大変適した題材である。さらには、その格闘を見る人たちも存在しているわけであり、それはいわゆる興行として消費社会そのものへとつながっていくものでもある。ほかにもたとえばジェンダーの視点から相撲を俯瞰すれば、多くは「女性蔑視の世界観」として非難される件[1]だけが問題化されるが、男性学の視点から検証することも可能だ。

このように、さまざまな問題系を投げかけてくる相撲であるが、本論では特にメディアにおいて大相撲と力士の身体はどのように表象されているのか、という問題について検討していきたい。相撲を「表象される身体」として捉える研究は、これまで行われていない。メディアとスポーツの研究は、近年注目されてきているが、多くの場合スポーツ全体や、プロスポーツ、オリンピックなどの大枠でのスポーツとメディアの関係が主なテーマであった。しかし本論では、力士の身体に焦点を充てる。それも、先行研究で紹介した自然科学分野からではなく、社会的な身体について述べていく。身体は個的でありかつ社会的なものである。それを踏まえ、本論では個と社会をつなぐ一つの身体として、力士の身体表象について論じていくこととする。

1. NHK テレビ番組おける相撲と力士の表象

1.1. NHK アーカイブス学術利用[2]関西トライアルⅡについて

0. で述べた研究目的に向けて、本論では NHK アーカイブス学術利用関西トライアルⅡの採択によって研究閲覧した NHK のテレビ番組を資料として取り扱っていく。周知の通り、日本相撲協会が主宰する大相撲本場所興行は、NHK によって 1953 年 5 月からテレビで実況生放送が行われてきた[3]。そして NHK が相

撲の全実況放送映像をアーカイブ化したのは1995年以降からである。NHKアーカイブスには、相撲中継映像だけでなく、ニュース映像、番組、ラジオ音声、番組台本などが残されているが、今回の研究閲覧ではドキュメンタリー番組を中心に閲覧した。その理由は一つには実況映像の閲覧には膨大な時間が必要になり、今回の閲覧期間では完了しないことが予想できたからである[4]。二つには、テレビ番組というものが、そもそも視聴者が期待する相撲や力士像に応える形で制作されるのであれば、不特定多数の人たちが期待する相撲や力士像の具体例を知るにはそれに関連した番組を閲覧することが有意義であるからである。

1.2. NHKアーカイブスのデータについて

2013年2月18日現在、NHKアーカイブス データベースは、テレビ・ラジオ番組が約647,000本、ニュース映像が約1,768,000項目、ニュース原稿が約1,042,000本、番組の台本が約38,000冊である。これらを合計するとおよそ3,495,000件になり、つまりこれがNHKアーカイブスが保持している全データということになる。

この全データの中で、テレビ・ラジオ番組とニュース映像は合計で2,415,000件になる。この中で「相撲」をキーワードにし、検索範囲[5]を設定しないで検索すると、87,200件が抽出できた（表1）。

表1　NHKアーカイブス　検索結果 件数（2013/02/18現在）（検索対象コンテンツ：テレビ・ラジオ番組、ニュース映像）

キーワード	検索範囲設定	ｺﾝﾃﾝﾂ	初出年	ﾋｯﾄ件数
相撲	全体	全体	1905	87，200
相撲	全体	ﾆｭｰｽ	1933	75，315
相撲	全体	番組	1905	11，605
相撲	ﾀｲﾄﾙのみ	ﾆｭｰｽ	1941	67，717
相撲	ﾀｲﾄﾙのみ	番組	1917	8，298
相撲／栃錦	全体	全体	1952	148
相撲／若乃花	全体	全体	1955	2，534
相撲／初代若乃花	全体	全体	1959	71
相撲／大鵬	全体	全体	1960	614
相撲／柏戸	全体	全体	1960	243
相撲／北の湖	全体	全体	1972	1，460
相撲／千代の富士	全体	全体	1977	1，915
相撲／貴ノ花	全体	全体	1970	1，305
相撲／貴花田	全体	全体	1988	185
相撲／貴乃花	全体	全体	1991	4，474
相撲／曙	全体	全体	1987	4，060

今回の研究では、ニュース映像は使用しないことにしたので、実際に閲覧対象となるデータは、「相撲→全体→番組」である11,605件と言うことになった。実際、膨大なデータ数である。これを全て閲覧することは、限られた期間内では無理だと判断した。したがって相撲や力士を具体的に表象している番組をさらに抽出する必要がある。そのように検討した結果、もっとも有効な番組コンテンツとしてドキュメンタリー番組を中心に閲覧することとした。その際、原則的に全国放送であることや、放映年がなるべく偏らないことなどを念頭に置き、番組を選択していった。選択は、番組タイトルや番組概要をチェックして行った。その結果、最初に179データを選択した。このデータ数も、期限内に閲覧し研究に利用するためにはまだ過剰であるため、最終的は80データを閲覧することになった[6]。この中には、NHKのドキュメンタリーとして看板といえるような「NHK特集」や「NHKスペシャル」「クローズアップ現代」なども含まれている。

1.3. 相撲と力士の表象の類型

閲覧する映像を選択している作業の中で気が付いたのは、それぞれ番組で相撲や力士を描くのに、いくつかのパターンがあることである。それはおよそ次のようなものであった。まず、(1) ある力士に密着取材することで、彼の大相撲での業績について探るもの、(2) ある力士の生い立ちに注目し、その力士のサクセス・ストーリーを物語るもの、(3) 新弟子の生活に着目し、どのように力士が養成されるのかを紹介するとともに、子弟を送り出す家族の物語を紹介するもの、(4) 相撲総体としての文化・情緒など、相撲を一つの日本の伝統として捉えるもの、(5) 力士の運動能力に着目したもの、(6) 現在の大相撲がかかえる問題点について取材したもの、などが挙げられる。

(1) には①「ドキュメント人間列島『高見山　故郷に帰る』」(1984年06月13日放送)、②「NHK特集『燃えるサンパチ組～大相撲の若手力士たち～』(1985年05月19日放送)、③「日曜インタビュー『見せる土俵　日本相撲協会理事長　二子山勝治』」(1991年06月09日放送)、④「ドキュメント　スポーツ大陸『ニッポンの土俵にかける　琴欧州・大関までの50日』」(2005年12月17日放送)、⑤「追跡！A to Z『朝青龍　引退の舞台裏～“強さ”と“品格”のはざまで～』(2010年02月06日放送）などがある。

(2) には⑥「ここに鐘は鳴る『人と業績　双葉山定次（時津風定次)』(1959年01月03日放送)、⑦「ス

タジオパークからこんにちは『第四十八代横綱　大鵬幸喜』」(1999年01月05日放送)、⑧「にんげんドキュメント『サンキューありがとう～曙太郎の13年～』」(2001年03月01日放送)、⑨「思い出のスポーツドキュメンタリー『横綱　栃錦～春日野清隆の相撲道～』」(2003年02月09日放送)、⑩「ハイビジョン特集『大鵬　あなたはなぜ強かった』」(2004年07月22日放送)、⑪「NHK映像ファイル『あの人に会いたい双葉山定次』」(2004年11月28日放送）などがある。

(3) には⑫「日本の素顔『櫓太鼓のかげに』」(1958年01月12日放送)、⑬「ルポルタージュにっぽん『新弟子　綱盗り一直線』」(1978年05月20日放送)、⑭「NHK特集『新弟子　15歳の土俵奮戦記』」(1979年05月18日放送)、⑮「ドキュメントにっぽん『津軽　少年力士物語～尾車親方の新弟子探し～』」(1999年03月12日放送)、⑯「ハイビジョンふるさと発『新弟子がやってきた～茨城・15歳　土俵の春～』」(2008年04月10日放送）などがある。

(4) には⑰「特集・親方夫人と力士たち　勝手口からみた相撲界」(1978年09月30日放送)、⑱「NHK特集『栃若　～新国技館を動かす親方たち～』」(1985年01月13日放送)、⑲国際共同制作　ザ・スモウ　英国人の見た大相撲」(1991年10月26日放送)、⑳「BE TRAD　伝統文化のイキな楽しみ方『第2夜　不思議の国のハイパースポーツ　相撲（SUMO)』」(1992年03月29日放送)、㉑「ちょっといい旅『お相撲さんがやって来た　～大阪・東成区』」(1997年03月08日放送)、㉒「知る楽　こだわり人物伝『伝説になった横綱たち“品格”の系譜　＜新＞＜全4回＞第1回「栃錦“マムシ”と呼ばれた正統派」』」(2009年04月01日放送)、㉓「MAG・ネット～マンガ・アニメ・ゲームのゲンバ～『相撲マンガ』」(2010年11月07日放送）などがある。これらの中には⑳や㉑など、外国人の目に映る相撲と相撲文化を描いている番組や、㉓のようにサブカルチャー分野から相撲に取り組む番組も含んでいる。

(5) はあまり数は多くないが90年代以降に見られる番組で、たとえば㉔「科学大好き　土よう塾『すもうとりってどうして太ってるの？』」(2005年12月17日放送)、㉕「科学大好き　土よう塾『驚き！お相撲さんの運動能力』」(2008年06月07日放送)、㉖「アインシュタインの眼『大相撲～スピードと衝撃の世界～』」(2009年06月28日放送）などがある。

(6) には㉗「クローズアップ現代『急増する外国出身力士～いま大相撲で～』」(2003年04月21日放送)、㉘「クローズアップ現代『相撲　人気復活のかぎは？』」(2005年08月31日放送)、㉙「GRAND SUMO EVOLUTION『大相撲2007　グローバル化進む土俵』」(2007年01月07日放送)、㉚「NHKスペシャル『八百長はなぜ起きたのか～揺れる“国技”大相撲～』」(2011年02月09日放送)、㉛「クローズアップ現代『大相撲はどこへいく』」(2007年11月07日放送）などがある。(6) に関わる番組は、最近の10年間ほどの間に目立つようになっており、大相撲を巡るさまざまな話題が、一つの社会問題として取り上げられるようになっていることが分かる。

2. 描かれる力士の「身体」

これまでに見てきたように、NHKの番組で取り扱われる相撲や力士には、その描かれ方にいくつかのパターンがある。それをあらためてまとめると (1) は力士の素顔、(2) は力士の人生、(3) は未来の力士、(4) は日本固有の伝統としての相撲、(5) は競技としての相撲、(6) は社会現象としての相撲、と換言することができる。相撲や力士の表象のパターン化とは、つまり相撲や力士の表象の分断でもある。冒頭で、相撲研究がいくつかの領域でそれぞれ別に研究されてきたことを述べたが、これも相撲というものが常にいくつかのパターンで分断化されてきている例である。このように相撲がいくつかのパターンで論じられるのは、そもそも相撲自体がさまざまな面をもっている多面体の事象であるからだと言えよう。たとえは新田によれば、相撲は「力比べ・格闘」「ルールのある競技」「型・相撲らしさを表現した技術」「文化装置としての相撲情緒」という下からの順番で階層化構造になっているという。つまり単純な肉体同士の競争というレベルから、近代スポーツ一般と同様のルールある競技として、そして、相撲という独自競技として、さらには土俵の四本柱、装束や太鼓、拍子木、丁髷、化粧まわしなどのスポーツとしては無意味に思える数々の相撲的演出まで、それらの総体が相撲なのだということである。さらに相撲の別の分断方法を提示するなら、スポーツとしての側面、神事としての側面、伝統芸能としての側面、興行としての側面というように分節化することともできるだろう。

そういう意味では、NHKのテレビ番組がいくつかのパターンに分かれるのは、メディアによる相撲の分断であり、そうやって分けられたそれぞれの分節は言うまでもなく視聴者が期待する相撲の分節だと言えよう。

ではNHKの番組に見られる相撲や力士の（1）から（6）の分節は、それぞれ何の表象なのだろうか。次にそのことについて述べていく。

2.1. 力士たちはどのように表象されるのか

わたしたち視聴者がメディアに登場する力士たちに期待することは何なのか。(1) では多くの場合、その時もっとも話題になっている力士をテーマにした番組作りがされている。たとえば優勝をしたり、とくべつな競技的活躍をしたり、引退をしたりなど、時事性の強い話題の力士が登場する。今もっとも人びとが知りたい力士である。その話題の力士が、いかにその成果を出すために努力をし、苦悩したのかという様子が描かれ、それらを肉体的にも精神的にも乗り越えた成功者として演出されることが多い。②では、同期の若い期待の力士たち[7]が切磋琢磨しながらも、現代の若者らしい言動をすることなどを伝えている。そこには力士として超人的な肉体や精神の持ち主である一面と、ひとりの若者であり、息子であり、夫であり、親であるという普遍的な人間性の側面も描かれる。相撲界という「特殊」な世界に住んではいるが、実は今話題の彼ら自身は特別な存在なのではなく、わたしたちと同じ肉体を持ち精神を持った者たちであるということが強調されるのだ。そしてさらにその「普通」の彼らが、いかに日々努力をして鍛錬を繰り返し、その結果、どうやって強靱で巨大な身体を持った者になるのか、という部分に視聴者は関心を持つ。そして、その関心はある固定化された力士の身体性を期待する。それは「努力する身体」であり、「克己する身体」であると言えるだろう。力士の身体イメージが一般的にたんに巨大で肥満であるという視点は、近代的な理想的身体性から見ればどこかユーモラスであり愛敬はあるが、リスペクトする身体とは言い難いイメージをもたらしている、ということを表象している。しかし、今話題の彼ら力士たちは、ある設定された目的に向かう身体であり、その目的にたどり着いた身体として表象される。それも力士である以上、相撲というプロスポーツにおけるアスリートして描かれるのだ。アスリートになった瞬間、彼らの身体はリスペクトされる身体へと変容する。それまでの、どこが愚鈍さまで感じさせる身体イメージを払拭させ、「闘う」身体として視聴者に差し迫ってくるのである。

このプロスポーツとしての相撲、アスリートとしての力士について科学的に言及するのが（5）による描かれ方である。科学的根拠を持って説明するので、(1) で作られたリスペクトされる身体の補完をすることにもなる。たとえば㉔や㉕は、小学生向けの番組であるが、太った大きなお相撲さんがどれだけ運動能力に優れているかを、子ども向けに楽しく優しく解説している。㉖は、最新鋭の映像処理技術や計測機器を使って相撲の基本動作における力士の身体能力について実験調査を行っている。たとえば立ち会いの速度や衝撃、四股、すり足のほか、まわしを切る動きなどをスーパーカメラで記録して、工学的にチェックをする。そして結果として伝統的な相撲動作は、粘り強い足腰を作り上げるために合理的であるという結論を提示している。力士の身体が外見以上に科学的にも合目的であるということは、わたしたちにとっては想定外の事実であり、その点がこの番組のもっとも強調したい部分であることがわかる。

また、肉体に脂肪をつけることと筋肉をつけることは、一般には相反するベクトルであると考えられている。ダイエットなどを思い起こせば、それはすぐにイメージできるだろう。しかし力士たちは、この相反するベクトルを同時に保っていなければならない。そのある意味肉体への理不尽さは、力士の身体を特別なものへと表象することになる。相撲や力士を（5）の分節で表象することは、「尋常でない身体」を科学的に説明することでもある。このことは同時に、相撲という伝統競技が実は科学的－近代的－なスポーツなのだ、ということを表象することにもなっている。相撲がいくつものパターンでいくつもの分節で切り分けられる曖昧で言語化できないものであるというイメージの中で、科学に裏付けられた競技という新たなイメージを作り上げているのだ。

（2）のパターンは、力士がひとりの人間であり、力士は生まれながらに力士なのではなく、力士になるのだということが描かれていく。そして番組の多くは伝説的力士が取り上げられる。⑥は1959年という戦後から復興したばかりで、いよいよ高度経済成長時代に入ろうかという時代の放映データである。戦争中に大日本帝国を象徴させられ「不敗神話」を背負わされたと言っても良い双葉山へのインタビュー番組である。ここで、元双葉山で当時の相撲協会理事長である時津風親方は、自分の苦労した生い立ちを語り、いかに努力精進して横綱の責務を全うしたかを語る。またスタジオには放映当時の現役横綱や、双葉山と闘ったライバルの元力士たちが登場し、いかに双葉山が偉大だったかを語り出す。番組自体は、放映直後に開催される大相撲初場所へいざなう触れ太鼓で終了するが、全体

としては双葉山に象徴される相撲美への賛辞である。さらに言えば、初場所の宣伝番組ということもできるが、努力精進することの正当性とその結果獲得できる確かな成長と成果を謳う内容となっている。⑨も戦後の相撲界を改革したと言われている元横綱栃錦の生い立ちと相撲への情熱が記録されている。⑩も高度経済成長期に横綱柏戸とあわせて柏鵬時代と呼ばれる大型力士の時代を作った超人気力士の大鵬についてのドキュメンタリーである。やはり苦しい生活からはじまった大鵬の生い立ちから、努力精進の結果得られた名声について、あるいはテレビ時代のアイドル的人気横綱として、その身体的美しさが際立った力士として、大衆文化とともに相撲があったことなどが描かれている。

（1）（2）（5）のパターンは、力士たちは驚異的な力と技を持った一流のアスリートであるが、その驚くべき身体能力はひたすら努力すること克己することで獲得できたものであるということを象徴する。そして同時に、しかしそれは彼の身体が特別だったのではなく、彼の生い立ちを含めた逆境が彼を「偉大な力士」に成長させたのだ、というものになる。

力士が成長するものだ、ということはとくに（3）のパターンの背景にある。最近は大学卒業の力士も増えてきたが、（3）のパターンに登場する新弟子たちの多くは中学校を卒業してすぐの 15 才くらいの少年たちである。まだ髷も結えないざんばら髪がその象徴でもある。彼らの多くはあまり裕福でない地方出身者で、家族のため親のために出世して親孝行をしたいという目的を持っていることになっている。そして、番付によって生活の隅々まで格差が作られている相撲界の様子を描き出す。とくに古いデータほどこの傾向が強く、新弟子をテーマとした番組としては検索の中でもっとも古い 1958 年放送の⑫では、厳しい稽古のほかに掃除洗濯ちゃんこ番などの雑用をこなし、食事も一番あと、相撲教習所での講義や大部屋住まいなどが、関取との比較とともに描かれる。視聴者はおそらく相撲部屋での暮らしはかなりたいへんなのだろうと想像する。そして相撲界は実力のみで勝負する厳しい世界であることを理解する。これが同じ新弟子の特集番組でも 1979 年の⑭になると少し趣が変わる。こちらは東京から親方がスカウトのために北海道に少年を訪ね、相撲部屋へ連れて来るところからはじまる。高校進学率が 94％になっていた放送当時、中学卒業してすぐに新弟子になる少年はすでに稀なものになっている。現在はさらに深刻になっているが、すでに新弟子獲得は困難な時代になっていた。そのことから、スカウトする親方は少年に対してだけでなく、その両親に向かっても丁寧で、責任を持って預かります、という主旨で話を進める。相撲部屋に入っても⑫の映像とは異なり、新弟子の厳しさを描きながらも、時には同期の新弟子たちと大きく笑い冗談を言い、さきに力士になっていた実兄との語らいなどを通して、現代の若者の心の葛藤と成長が描かれるようになる。1999 年の⑮では新弟子獲得のさらなる困難さと、新弟子を「育てる」という教育者としての親方の姿が中心に描かれる。さらに 2008 年の⑯になると、若くて美男子の親方が苦労しながら部屋を運営し、やっと獲得した新弟子を育てることで自身も成長するという物語が紹介されている。

（3）は相撲ドキュメンタリーでは時代を超えて、何度も描かれるテーマであるが、いずれも未熟な少年が様々な相撲的経験を通して大人へと成長する物語なのである。その物語は、少年によってもちろん様々であるが、実家の家族との関係や別れを越えて、あらたな相撲部屋という男だけの協同集団生活へと入っていく。そこでは相撲部屋は現代の若衆宿ともいうべき位置づけとして、少年が「大人の男」になるための通過儀礼のひとつとして描かれる。その中では、たとえば個室生活が習慣化しているため大部屋では眠れない新弟子の姿などが映し出され、現代の家族関係や教育方法の変化が分かったり、その時代時代の若者の人生観や生活習慣などの変化も知ることができる。いずれにしても、常に「今どきの若者は」という常套句が背景にあり、「伝統と普遍性」を前面に押し出そうとする大相撲の社会と自分のアイデンティティとの狭間に揺れる現代の力士たちの姿が浮き彫りにされる。映像に映し出される新弟子たちの身体は、まだ相撲経験のない未熟なものであり、白くてつるんとした四肢も子どもっぽい。それが関取の完成された身体と比較されることで、新弟子たちが関取にまで成長する困難さと可能性を視聴者に想像させてくれるのだ。

これまで見てきたように、番組で描かれる力士の身体は、はじめは未熟であっても日々の稽古や生活による鍛錬や修行を経ていくことで、だれもがいつしか立派なお相撲さんになる、というものである。成長することが正当であり、努力すればするだけ成果を得られ、それを競い合いながらまた成長する、という近代的な生産主義と競争主義、成果主義に合致する世界観が展開される。これだけ見ると、だれにでも開かれた実力主義かつリベラルな世界で力士の身体は完全に自由であるかのように見える。しかし、それですまないのが相撲の興味深い点なのだ。それは（4）（6）のパター

ンで示される、「相撲らしさ」という部分に要因がある。

（4）のうち⑯は相撲に関するドキュメンタリーでも珍しい視点で作られている。それは、相撲が女人禁制であることを前提としているからこそ生きてくる演出である。この番組は、相撲部屋の女将さん（親方婦人）からみた相撲や力士について描かれている。つまり、相撲部屋の裏側を前面に出してくれている番組だ。ふだんは見ることのできない相撲部屋の勝手口をのぞき、相撲部屋の運営に女将さんがどれだけ重要で、表に立つ夫である部屋の親方をどのように支えているのか、映し出される。若い女将さんもいれば、ベテランの女将さんも登場し、それぞれの世代観で相撲部屋の運営に尽力している。女将さんは、相撲部屋では親方婦人であるとともに弟子たちにとっては母親役であり、登場する女将さんたちは皆大家族のマネージメント役に徹している。旧態依然で現代社会とは逆行するといわれる相撲社会でも、実は女性の力が不可欠で、その役割はたいへん重要なのだと言うことが強調されており、放映が70年代であることから推察すると、フェミニズムの波がこの番組制作を後押ししたのかと想像をする。相撲は伝統性や正統性を強調するものでもあるが、一方で新しい社会の動きとも連動しているのだとすることで、時代遅れにならないことを訴えるのだろう。

国内向けに新しく変容する角界を示しつつも、やはり相撲が日本の伝統の象徴として扱われることは相撲協会としても意義深いはずである。そういう意味では、外国人から見た相撲が「日本の伝統」として抽出される番組は貴重である。本論では記述してないが、ニュース映像でハワイ巡業や上海巡業の様子が残されていたり、ドキュメンタリーでもメキシコ巡業やロンドン巡業などが特集として作られていたりする。それらには、外国の人たちが、どんなふうに力士たちやそれに象徴される日本文化を歓迎し珍しがったか、について、日本人の視点から描かれている。一方たとえば⑱や⑲は、外国人自身が相撲や力士の身体性をとおして日本文化そのものの不思議さや特徴を描き出そうとしている。中でも⑲では、相撲の力士は勝負に勝っても笑わない、という点に注目する。勝負に勝てば、通常であるならその喜びを表情や動作にあらわすはずであろうに、力士たちは勝っても笑わない、それはとても奇妙だと外国の人は考える。そして喜びを顔に出さないことを、日本の武士道と結びつけて納得しようとする。そこで「つまらぬことに声高く笑うは士（さむらい）の作法にあらず」という言葉を引用し、力士をサムライ・ニッポンの伝統的作法の継承者として取り扱う。また、相撲の立ち会い前の仕切りの所作についても次の様に分析する。仕切りのような時間は一見無駄のように見えるが、この所作はまさに日本そのものである、と。日本流のビジネスは、根回しが重要でありそのためにじっくり動き、最終的には一気に前に出て闘うのがセオリーであり、このセオリーはまさに相撲の仕切りと同じである、と分析するのだ。

実はスポーツという視点からもこの仕切りの所作は特別な意味をもっている。相撲はさきに見たように実力主義であるから、近代スポーツとも親和性が高いように見える。しかし、近代スポーツと決定的にことなるのは、公平性[8]と合理性の部分である。端的なのは、仕切りから競技が開始される立ち会いまでの問題だ。近代スポーツがその競技を開始する際には、スターターという第三者による「用意・ドン」が採用されているが、相撲の競技開始は競技者同士の「気が合う」瞬間とされている。行司の「ハッキヨイ」のかけ声は、スターターとしての合図ではなく、競技者同士の気が合った瞬間を見極めるものでしかない。「気」という計測できないものを基点としてはじまる競技は、恣意的であり非合理的である。「気」という言語外の要素ではじまる競技は、日本の互いの感情を読み合うユニークな文化にとっては違和感が少ないが、西欧的身体観で取り扱われる近代スポーツのセオリーでは不可解で理解しがたい身体観となる。

この言葉の外にある不可解な身体観がまさに力士の身体であり、西欧社会から見れば、不思議で神秘的なものとして映るのだろう。しかしこのことは、現代の日本社会の価値観や美意識がもはや西欧がもたらした近代である以上、現代の日本人からしてもやはり不思議であり理解しがたいものとして映っている。それが分かるのが最近の相撲界をとりまく諸問題である。それが（6）のパターンである。まずは、㉗では日本生まれの新弟子が獲得できない現状とグローバル化する社会を背景に、外国出身の力士が急増している状況について紹介している。相撲らしさ、日本らしさを強調したい相撲界であるが、実際に活躍するのは外国人力士であり、彼らをいかに伝統の継承者として育てていくのか、あるいは伝統の変革が必要なのか、などが問われる。稽古の仕方やちゃんこの在り方、共同生活の在り方など、新たな社会状況に相撲界はどう対応すべきかが描かれる。㉘は、現在、相撲人気が低迷しており本場所への観客動員が減少し、収益も大幅に減っていると言う問題が提示される。日本人から人気がなく

なり、新弟子獲得にも苦慮する状況が、外国人力士獲得へとつながる。ところで、日本の伝統として「ハッキヨイ」に象徴される非合理的な相撲界は、常に「八百長」という疑いをもたれながら成り立ってきた経緯がある。それが表面化し、相撲協会の存亡問題へと発展した事件を検証したのが㉚である。八百長相撲は、相撲の興行という側面や、引退すると社会的保証のない力士たちの労働条件の問題や、「気」に象徴される人間味が含まれる競技である側面など、さまざまな相撲の要素が関連し合って発生したといえる。単純に土俵の中だけの勝負で決着がつかないのが相撲であり、そこに生きる力士なのである。生きるということは、「相撲が生活」だと言うことである。これは2012年の拙稿でインタビューした力士から得られた言葉である。力士にとって、1日のうちこの時間からこの時間までが力士である、という概念は生じない。そもそも、相撲が相撲のアイデンティティとする髷は、力士をどのような場面でも力士としてしか見られざるをえない身体を作り出す。その結果、力士は引退して髷を切るまで力士であり続けることになる。逆に言えば、土俵を降りても相撲なのであるが、土俵の上も日常生活の延長であるということだ。公私の境界がない曖昧な世界観は、まさに日本的な美意識[9]の一つだと言える。つまり、これら言語の内外の要素こそが「相撲らしさ」であり、たんに力が強い、技術がある、だけでは済まされない相撲の美意識であり、力士の身体性である。その「日本的」美意識や力士の身体性が、近代が作り上げた制度や感性とは相容れなくなっている。その結果社会制度との間に軋轢を生み、問題化しているのが相撲をとりまく諸問題の根源にあるのではないだろうか。

2.2. 情緒が肉体を包み込む身体

これまで（1）から（6）までのパターンに表象される相撲や力士について述べてきた。力士は努力精進するもので、それをたゆまず続けることで大人の完成した力士になっていく。そこには、実力主義という側面がうかがえるが、相撲に生きる力士たちの身体には、スポーツとは相容れない合理的でないものが含まれているようだ。

いずれにしても、機械的、物理的、肉体的ないわばフィジカルな部分だけでは成立しない競技が相撲である以上、力士の身体性もいわゆるスポーツ・アスリートとしてだけの身体ではいられない。感情や情緒を排除し、究極の肉体だけで競い合うのが近代スポーツであるなら、力士の身体はスポーツ・アスリートとは異なるものとなる。むしろ力士の身体は、感情や情緒によって凌駕されるものであるのだ。つまりはじめからコントロールされる身体なのである。近代的身体観では、精神と肉体は二項対立構造の下にある。そして、それら二つはそのままにしておくと制御できなくなるものであり、したがって理性によってコントロールされるべきものとされている。抑えきれない感情や、突然あらわれる病気などは自分ではままならない恐怖であるため、理性や理知の力によって排除すべき対象であるのだ。しかし、力士の身体性は少し異なる。力士の身体において、精神と肉体は対立しない。精神も肉体も自分のものであると同時に、相手に読み込まれて成立するものであって、そこには西欧的身体観がもつ明確な自分と相手の区別はない。力士の精神や肉体は、相撲部屋での共同生活の中で兄弟弟子や親方との関係によって作り上げられるもの、常に観客や周りにいる他者たちによって見られることによりできあがるものなのである。もちろん、力士が相撲に勝つためには、まず強靱で大きな肉体を作らなければならない。そして土俵で相手と相対したら、「相手より強い気持ちや根性」が先行しなければならない。高揚する感情は、力士の身体をみるみる紅潮させる。自分の身体を叩いたりすることもあるが、静かに闘志を燃やすと言うこともする。それはやはり相手への威圧感となって、「強い気持ち」を表現することと同じことになる。このような感情的な部分を、肉体に向けて注ぐことで、実力以上の力を出せると考えられているのが、力士の身体である。

また一方で、格闘技でありながら、相手との勝ち負けだけにこだわらないという側面を持つこともあるのが力士の身体である。インタビューなどで、「闘いの相手は自分である」と力士が発言することや、仮に負けても「良い相撲」を取ることにこだわるなど、自分の力士としての尊厳に深く関わろうとする自己言及的な側面もある。

これらのことは、本来近代スポーツ競技としては、とても不条理な話である。しかし、西欧的近代的身体とは別のものが「力士の身体」であるのだ。つまり、気持ちや根性、自己完遂への欲求などと呼ばれる情緒が肉体を包み込む、という身体なのである。これが、近代スポーツ・アスリートとは異なる非合理性である。

2.3. アンドロジニーと周縁的マスキュリニティな身体

ここで、これまで見てきた（1）から（6）の表象の

パターンとは別な視点から力士の身体について触れておきたい。

NHK の番組閲覧の分析からも、力士の身体は土俵の上では力強く巨大で躍動する身体であるが、土俵の外ではその大きな体はときにはユーモラスで愛敬があり、子供たちに人気がある優しさを持った身体であると表象される。よく聞く「気は優しくて力持ち」という言葉とそのイメージを体現する身体が力士―お相撲さん―の身体であろう。

ところで、この特徴的な力士の身体をジェンダー論の視点で見てみると、興味深いことが分かる。土俵の上で、相手と対峙し、身体的能力と人格的なパワーとで勝負するのが相撲だとしたら、それはまさに男性ジェンダーの表象でもある。他を圧倒するためのパワーを前面に押し出して相手を凌駕するのは、男性の自己実現とそれによる社会性の獲得を意味しており、「男らしさ」の表象である。ところが一方で、土俵の外にいる力士たちは、大きいとはいえ、丸い身体でゆったりした動き、幼稚園訪問や高齢者施設などでも大変な人気である。相撲部屋ではちゃんこと呼ばれる食事も力士が作り、掃除や洗濯など女性の役割とされている家庭内作業を力士自身が行う。何より子どもや弱者に優しいというのは、女性ジェンダーの特徴でもある。丸みを帯びた肉体は、それだけで雰囲気を柔らかくする、女性性のイメージである。そのように見てみると、力士の身体には男性ジェンダーと女性ジェンダーが共存していることがわかるのだ。

最近のスポーツジェンダー研究では、アンドロジニーの概念が持ち込まれている。女性もこれまで男性だけに限定されてきたスポーツ競技に参加するようになっており、逆に女性が中心になって行われてきた競技に男性選手も参加する機会が増えてきている。たとえば前者はスキーのジャンプであり、ラグビーであり、ボクシングなどである。後者はシンクロナイズドスイミングや新体操など、芸術性を評価に取り入れる競技である。そもそも、競技自体を男性的なもの、女性的なものとしてジェンダー概念に基づいた区別をするのではなく、男女の性差なくそれぞれの競技が成立し、それができる環境をととのえるということが叫ばれている。

そういう側面から見てみると、いかに強い肉体かを比べ合う格闘技である相撲は、一見きわめて男性ジェンダーを強調表象しているように考えられるが、さきほども見たように、肉体以上に情緒的側面が重要視される競技でもある。情緒は西欧的性役割からいえば女性ジェンダーが担う部分であり、そういう意味では相撲は女性ジェンダーの競技であると言うことも可能かも知れない。

相撲はさきにも述べたように、土俵は女人禁制であり、力士の髷やまわしに女性は触れてはいけないことになっている。その意味では極めて男性ジェンダーが発揮された競技であるとも言えよう。それだけでなく、極めてミソジニーな競技であるとも言えるだろう。その結果、相撲には女性が関われない。そしてその分だけ、男性である力士自身が女性ジェンダーを補完する必要が生じたのだとしたら、それはそれで興味深いことだろう。とはいえ、ジェンダー論で議論する力士の身体性は、近代知による男女二項対立構造の中にあることになってしまうが、そもそもさきほどの肉体と感情の件でも触れたように、西欧的社会概念をそのまま当てはめて理解しようとすること自体が、相撲とは相容れない部分があるのだろう。力士の身体を考えることは、そのまま近代的なるものへの疑義とともに、新しい人間存在や社会の構造を提示してくれる可能性を持っているのだ。

ところで、力士の男性としての身体は西欧的審美性から見ると、まったく理想とかけ離れた身体性であると言って良い。何より肥満体型が美的な価値観から最も遠くに置かれる要因だ。今回の NHK の番組の⑱では、大相撲ロンドン公演の様子が描かれていたが、ロンドンでもっとも人気がある力士は千代の富士であった。そして彼以外の人気力士は、寺尾、霧島という力士たちで、いずれも筋肉質な体型であることが特徴なのだ。

日本でも相撲人気が低迷している理由の一は、特に若い世代の人たちにとって、力士の肥満体型が美的に受け入れがたいものだからかもしれない。世の美的な身体はダイエットされたスリムな身体であり、男性に求められる理想体型は「細マッチョ」という脂肪などの無駄のない細身で筋肉質な肉体である。そういう中で、力士たちの肉体は錦絵に描かれたり、専門雑誌の表紙になったり、相撲ファンの間で語られたりする。今回閲覧の㉔では、力士が単に太っているだけではなく、脂肪以上に筋肉を蓄えている身体である、ということが解説されている。本当は力も技も人並み以上に持っているが、日常では優しく微笑む人気者のお相撲さん、という身体はアンドロジニーな身体性を持ちながら、一方では周縁的マスキュリニティな身体とも言えるだろう。メインストリームの男性身体にはなれないが、公的な裸体で格闘する身体は、西欧的審美性と

は別のオリエンタルな美として、周縁的マスキュリニティな身体として存在する。何より、力士たち自身が自らの男性性を自負しているのだから。

3. 力士からの応答

これまで見てきたように、NHK アーカイブスで閲覧してきた相撲映像から、本論では力士たちの身体は6つのパターンでメディアの中に描かれていると示した。そしてその6つのパターンは、わたしたちが期待する相撲や力士の側面であると考えられるだろう。これらの期待や相撲観、力士観について、力士当人はどのように応答しているのか、について触れておく。

「NHK 映像ファイル　あの人に会いたい『初代・若乃花（力士）』」（2011 年 12 月 03 日放送）で、元若乃花の二子山親方は「お客さんに喜んでもらうような相撲をとらなきゃ。ただそれだけだったんです。」と繰り返す。⑭の中で、春日野理事長（元横綱栃錦）は「勝ち負けはあくまで勝負の結果である。それよりも厳しい修行を乗り越えて立派な力士としてまた立派な人間として成長して欲しい。」と力士のありかたについて語る。若乃花も栃錦も今は故人になっているが、両名で戦後の栃若時代といわれる相撲人気時代を支え、引退後も相撲協会の理事長として、特に栃錦は判定にビデオカメラを導入したり、立ち会いの仕方や力士の倫理観などについて改革を行ったり、現両国国技館を建設したりと相撲界の改革に尽力してきた。したがって、角界において栃錦と若乃花の言葉は、相撲の神様と言われた双葉山と同様に、力士の心得として影響力がある。そんな彼らの言葉が NHK アーカイブスに残っており、その代表的なものが先のものである。

「お客さんに喜んでもらう相撲」という言葉は、今でも現役の力士たちが繰り返し繰り返しインタビューなどで発する言葉である。相撲は力士同士の勝負であるが、それは観客がなくては成り立たない興行でもある。相撲がもっとも相撲らしいのは、この興行的側面だ。相撲や力士を魅力あるものに仕立て上げて、商品価値を上げる必要がある。その収入によって興行は継続され力士たちへの報酬となる。これは興行の側面でもあり、芸能の側面でもある。観客が楽しめるように、花相撲という本場所とは異なる芸能に徹した興行もあり、地方を巡業するのも重要な興行である。若乃花の言う「お客さんに喜んでもらう相撲」とは、力士同士が力一杯に技と持ち味を出して、その力や技術や敢闘振りを見てもらうということだ。円形の土俵では 360 度全方向から見られることになる。それを意識して身体の隅々まで相撲取りに徹することが、若乃花の真意だろう。そこには、「伝統」に身を置いて相撲人気を保つためのプロとしての責務と、人気が相撲を支える唯一の確証であるという切迫感にも似た現状への危機感があったのかもしれない。

また、栃錦は「勝ち負けはあくまで勝負の結果である。それよりも厳しい修行を乗り越えて立派な力士としてまた立派な人間として成長して欲しい。」と言っている。ここでは、相撲取りであることを越えて、一人の人間としての成長を期待している。この背景には、厳しい稽古で鍛えられた身体は、結果として人間としても優れた者になりうるのだ、という身体観がうかがえる。そして、おそらく厳しい稽古を重ねてきた自分自身への自負があるはずだろう。

力士は、常に努力精進する者であり、成功するための物語を抱えている。そして何も知らなかった少年が相撲によって大きく育ち立派な一人の男として完成する。そのような肉体的にも人間的にも魅力的なお相撲さんなのだ、と「振る舞う身体」なのだ。

4. おわりに

力士の身体は、力士であるべく振る舞われるものである。相撲が神事やスポーツや芸能や興行などといったさまざまな側面をもっているために、そこに生きる力士たちは、その都度さまざまな身体として振る舞わなければならない。神の使いとして、闘う男の中の男として、巧みな技や尋常でない力の持ち主として、それらの総体としての美的な存在として、人びとの期待に応えなくてはならない。力士に期待する人びとの思いは、メディアによってパターン化されて、力士の身体性に表象される。それは、個としての力士が社会とつながる瞬間でもあり、その逆にひとりの個人が「力士」という総体とつながる瞬間でもある。そのつながりのさきに、個としての力士とひとりの個人とがつながる瞬間もあるだろう。身体とは個的でありかつ社会的なものなのである。

なお本論は NHK アーカイブス学術利用関西トライアルⅡ第 1 期の成果の一部である。

註

1　2001 年 3 月の大相撲大阪場所で、当時の大阪府知事であった太田房江氏が、千秋楽の優勝力士表彰式では太田知事自身が土俵に上がって直接知事賞を贈呈したいと申し出たが、日本相撲協会は「土俵は女人禁制」であることを理由に拒んだ。

この件が女性差別ではないかということで、一時話題になった。

2　NHK アーカイブス データベースは、テレビ・ラジオ番組（647,000 本）、ニュース映像（1,768,000 項目）、ニュース原稿（1,042,000 本）、番組の台本（38,000 冊）を含んでいる。学術利用トライアルⅡでは、これらのデータを研究採択者に対して基本的に閲覧可能とするものである。またトライアルⅡの目的は「NHK アーカイブスの学術利用に向けた公開のあり方やそれにともなう課題等の検討を行うために、学術研究者へのコンテンツ公開の試行として実施するものです。今回は特に、研究成果の展開の検討も含め、学術利用の総合的な価値を検証します。（http://www.nhk.or.jp/archives/academic/frame/frame.html　2013 年 9 月 10 日取得）」ということになっている。

3　初回のテレビ中継は 1953 年 5 月 16 日。実況は石田吾郎アナウンサー、解説は第十代伊勢ノ海（元前頭筆頭柏戸秀剛）親方。現在では、NHK 総合放送で幕内力士の取り組みが実況されているほか、NHKBS 放送でも幕下以上の取り組みが実況されている。

4　今回の映像閲覧は質的調査を中心としているが、機会が得られるなら量的調査も検討していきたい。

5　キーワードの検索範囲は、タイトル、出演者、制作スタッフなどのほか概要や権利者なども含む情報全てである。

6　合計で約 2,690 分（約 44 時間）の閲覧で、1 データ平均は約 34 分である。

7　昭和 38 年生まれの力士たちは、横綱や大関を輩出した年代で、ここでは後の横綱北勝海（現相撲協会広報部長　八角親方）や横綱双羽黒などの若き日の姿や言動を知ることができる。

8　その他の格闘技（柔道、レスリングなど）と異なり体重による階級がない、女性をプロの選手から排除している、など。

9　国風文化が花開いた平安時代を、日本独特の美意識の原点だとすると、たとえば、壁のない家屋は自他の境界を明確にしない文化の象徴であるし、顔を直接会わすことなく限られた字数で感情のコミュニケーションを行う和歌は、たがいの感情を読み合う曖昧の文化でもある。

参考文献

新田一郎『相撲の歴史』、2010、講談社学術文庫

亀山佳明『生成する身体の社会学　スポーツ・パフォーマンス／フロー体験／リズム』、2012、世界思想社

ニック・クロスリー（西原和久、堀田裕子訳）『社会的身体』、2009、新線社

西村秀樹、スポーツにおける抑制の美学』、2009、世界思想社

サビーネ・フリューシュトゥック、アン・ウォルソール編（長野ひろ子監訳　内田雅克・長野麻紀子・栗倉大輔訳）『日本人の「男らしさ」サムライからオタクまで「男性性」の変遷を追う』、2013、明石書店

アンドリュー・ブレイク（橋本純一訳）『ボディ・ランゲージ』、2001、日本エディタースクール出版部

阿部潔『スポーツの魅惑とメディアの誘惑　身体/国家のカルチュラル・スタディーズ』、2008、世界思想社

大鵬『相撲道とは何か』、2007、KK ロングセラーズ

杉村二郎「力士ノ體質二關スル研究」、1944、金澤醫科大學十全會雑誌

小川新吉・吉田善伯・山本恵三・永井信雄「相撲力士の体力科学的研究（関取の体力と発達）」、1973、体力科學 22(2)、45-55、

桑森真介「競技力別（番付位置別）にみた職業力士の身体組成と体肢組成」、1986、明治大学教養論集

桑森真介「相撲競技者の競技力と形態および筋機能」、1995、明治大学教養論集

岡田龍司・高島規郎・芦田信之「柔道、レスリング、相撲競技者のルールと技からみた体型比較」、2006、近畿大学健康スポーツ

川野佐江子「力士の“よそおい”と〈マスキュリニティ〉―ライフストーリー・インタビューからの研究―」、2012、大阪樟蔭女子大学研究紀要第 3 号

「現代思想『特集　大相撲』」11.2010、青土社

A Phenomenological Exploration of the Embodiment of Sumo Wrestlers and Their Corporeal Representations at the Grand Sumo Tournaments Televised by the Japan Broadcasting Corporation（NHK）

Faculty of Liberal Arts, Department of Fashion and Beauty Sciences
Saeko KAWANO

Abstract

There have been some studies on the traditional Japanese art and sport of sumo wrestling across diverse fields such as history, cultural anthropology, traditional art, and medicine. However, much of this literature is piecemeal and generalized. Moreover, it lacks an exploration of how sumo wrestlers are represented within modern Japanese society. To date, there have been no phenomenological studies that explore the embodiment of sumo wrestlers through their public performances and their private lives. This paper aims to address these gaps through a study of how sumo wrestlers are embodied and represented, corporeally, at the Grand Sumo Tournaments using broadcast data from the NHK archives. Based on my phenomenological analysis of these representations, I elucidate public expectations and representations of sumo and of sumo wrestlers that emerge within these nationally broadcasted spectator programs. The inclusion of my research in NHK's *Trial Project on Academic Use of the NHK Archives* provided me with access to Japan's largest archive of television broadcast material.

Keywords: sumo, sumo wrestler, corporeal representation, NHK